

和名の星々

たなか踏基

星に和名がある事に関心が薄かった。厳密に言えば何気なく見過ごしてきた。拙小説『奇妙な異星人』を目下執筆中である。舞台は三地域に跨り、越後系魚川、信州松本、武蔵国、モチーフは宙・星である。天文学を斜に構え、天ぶんがくが描けたらと願っている。

資料を集め、時に取材をして構想を練ってきた。ネット検索で一冊の本にする機会を得た。松岡正剛の「千夜千冊」(第三四八夜)に野尻抱影著『日本の星』(中央公論社、絶版)があった。私は松岡氏の講演を一度聴いた記憶がある。早速地元図書館からその本を借り出して読んだ。本紹介前に拙短歌七詠である。

冬雷の音の遠のきし満天に

よばいの星は尾を引いて落つ

しんがりをききかず宙の三連は

煙草くゆらし我を見守る

白樺の薄き緑の葉のゆれて

黒姫上る問いかくる月

月光の青に浸れば静かなる

錨の星は宙を巡りぬ

天空の梯子降ろせし姫川に

四三の星の瞬きてあり

たまゆらに目覚めし宵に六連の

何でかさざめく恋の断片

みすずかる信濃は遠き明星の

夜寒の風を君は聞いてか

拙短歌で詠んだ「よばい星」とは流れ星の、

「錨の星」とはカシオペア座、「三連」とは三光、または三ツ星ともいいオリオン座の、「四三の星」とは「七曜」、つまり北辰(北極星)の七ツ星ともいい大熊座の北斗七星の夫々和名である。流星は、西洋では余り良い印象を持たれていないが、日本では流星は密かに尾を引いて光るので、よばい星、よめいり星、つかい星等と古くから呼ばれてきた。「六連」とは六つら星、昴である、「明星」は明けの明星、ご存知金星のことである。

以下『日本の星』から抜粋記載してみる。北極星は天心の動かぬ星として、北辰以外にも一つ星、心星、子の星、番の星等の和名がある。信州の諺に「昴まん時粉八合」がある。昴星が中天に掛かる時に蕎麦を時くと、収穫時には粉が八合採れるという意味である。プレアデス星団のこの人気星も、形状や固まる印象からスマル、スクバル、一升星、羽子板星、苞星とある。

シソウの星、四三の星の意味は、北斗七星のことであるが瀬戸内の老船頭の言に寄れば、単に北斗を杓の四星と、柄杓の三星に分けた名ではない。漁師達が手慰みで行う「半博打」の二つの賽の目からきているというから大変興味深い。だからシサンと読まずシソウである。真闇の玄海や周防灘の荒波の中を、老船頭が不眠不休で魚を捕って航海するとき、小船の舵柄を握りしめ終始、宙ばかり見据えて操舵する由、子ノ星(北極星)とシソウの星を仰ぎながら漁をするのだという。

四三の星天の壺皿こぼれけむ・抱影

盆上で二つの賽を筒から振り出す目の特殊な読み方、三三、三三六、四一、四三、五一・・「四三」はその一つであるという記載がある。四三の星の和名は平安時代から存在したと推論している。

星はすばる、ひこぼし、明星、タツツ、よばいぼしをだになからましかば、まして。

と清少納言が枕草子に記している。別和名として舵星、柄杓星、鍵星、船星、剣先星等である。春の大星座、獅子座の和名も面白い。

大鎌部を英語で、*the sickle*(草刈鎌)と呼ぶが、兩樋を掛ける金具の形状と見立て「樋掛け星」という和名がある。星レグルス(*Regulus*)は黄道上に位置し、獅子の心臓とされ白光を放つ一等星で、西洋では航海を司る四王星の随一とされる。プレアデス星団(昴)の近傍、西の牡牛座の赤い星アルデバラン(*Aldebaran*)を昴の後から昇る意味から「スマルの尾の星」という。天上でV字形を描くヒアデス星団は「釣鐘星」という。

大犬座の主星、全天で最も明るい青い星(天狼星シリウス(*Sirius*)は、青星、大星という。子犬座プロキオン(*Procyon*)和名は色白)、大犬座のシリウス、オリオン座ベテルギウス(*Betelgeuse*)の各星で構成星は、冬の大三角と呼ばれる。オリオン座の全体形状の和名は「鼓星」である。個別に赤みを帯びた星ベテルギウス、青みがかった星リゲル(*Rigel*)を、源平(白赤旗)に見立て、夫々平家星、源氏星と呼ぶ地方が美濃にある。オリオン帯三星、ミンタカ(*Mintaka*)、アルニラム(*Alnilam*)、アルニタク(*Alnitak*)二等星、三ツ星、三光、三連、三丁の星、稲架の間の和名がある。

昴を中国の廿八宿からきた名だと思ってきた。上古の玉の名に多麻能美須麻流、五百箇御統がある。スマルが昴に転じた純粹和名と知った。「空」「宙」は、元々佛教用語であるという。ならば「星」は何処から派生してきた言葉なのか？

了